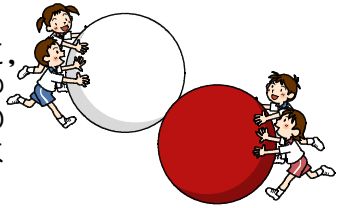


「あたりまえ」のありがたさ、幸せ

校長 小 西 信 輝

31日(日)に行われる「南っ子運動会」が目前になりました。子どもたちは、この数週間、運動会に向けてグラウンドや体育館で元気に、そして真剣に練習を続けてきました。当日は、徒競走やリレー、玉入れや綱引など様々な競技・種目にがんばる姿を、そして高学年は実行委員会の係に責任をもって取り組む姿をぜひご覧いただき、ご声援くださいますようお願いいたします。



ふだん、子どもたちが教室で学ぶ時の真剣なまなざしやグラウンドでカー杯活動する姿から、みずみずしい「生命」を感じています。こうして、学ぶことへの純粋さを残しながら、自己実現できるよう成長してもらえればと願っています。

本校教育目標の一番はじめに「^{たん}鍛」(進んで体を鍛える子ども)があるように、私たちは、心の底から子どもの心身の健やかな成長を願います。しかし、成長の過程で周りの大人や本人の様々な価値観、欲などから、つい余分なことまで願ってしまい、「あたりまえであるありがたさ」を忘れてしまいます。私自身は過去の体験から、忘れてしまいがちな健康の大切さや普通に働いたり生活したりできることの幸せをできるだけ折にふれて思い起こすようにしています。

以下に載せた井村さんの手記も、“あたりまえであることの幸せ”をさらに強く感じさせてくれるもののひとつです。

「二人の子供たちへ
心の優しい、思いやりのある子に育ちますように。
悲しいことに、私はおまえたちが大きくなるまで待ってられない。」〈略〉…

あたりまえ

こんなすばらしいことを、
みんなはなぜよろこばないのでしょう
あたりまえであることを
お父さんがいる
お母さんがいる
手が二本あって、足が二本ある
行きたいところへ自分で歩いてゆける
手をのばせばなんでもとれる
音がきこえて声がでる
こんなしあわせはあるでしょうか
しかし、だれもそれをよろこばない
あたりまえだ、と笑ってすます

食事がたべられる
夜になると、ちゃんと眠れ、
そして又朝がくる
空気をむねいっぱいにする
笑える、泣ける、叫ぶこともできる
走りまわれる
みんなあたりまえのこと
こんなすばらしいことを、
みんなは決してよろこばない
そのありがたさを知っているのは、
それを失った人たちだけ
なぜでしょう
あたりまえ



『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ-若き医師が死の直前まで綴った愛の手記-』より

この手記を書いた医師井村和清さんは、骨肉腫のために右足の膝から下を切断し、その後は悪性腫瘍の肺への転移によって30余年でこの世を去りました。手記をもとに映画やテレビでドラマ化されたこともあり、ご存じの方も多いと思います。

手記には、井村さんが愛する家族を残して逝ってしまわなければならない無念さや苦悩、周囲の人々への感謝の気持ちが綴られています。これは手記の最後にある詩です。

私たちは、自分や周りにある「あたりまえであるありがたさ、幸せ」を知る必要があるのではないのでしょうか。そして、それを子どもたちに伝えることも。